

## 初めての海外での 書の個展

高橋 香石

二〇〇二年八月三十日、私の五十歳の誕生日に日本を発ち、記念すべき、私の夢の実現の機会を得た。海外での、書の個展である。

しかも、明治維新(1868)の時、日本の近代化に貢献した、長崎にあるグラバー邸の主のトーマス・ブレイク・グラバー(1838~1911)が、学生時代を過ごし、伊藤博文・井上馨・森有礼・五代友厚・山尾庸三など、日本人留学生が滞在した、スコットランド・アバディーン市のグラバーハウス(グラバー記念館)なのである。今回、友子さんが私と同行し、フラワーアレンジメントをして下さったが、花材や石や重いガラス類は全て現地調達した。安全性と時間不足の為に作品などは手荷物にせざるを得なかったが、二人で四十kgオーバーで二十五万円支払う所必死で交渉し、九万五千円で落着いた。作品は全部で三十二点、五部屋+階段を含めた壁面三百六十度、グラバーハウスの略全体を使用した。

十二時のオープニングセレモニーは、エディンバラから太田領事・アバディーン市議会議員・盆栽マン・P・P弟・J・T・長崎大学教授・新聞記者四

人・カメラマン二人・ステンドグラスの女性等、たくさんの方が見守る中、太田領事にメッセージを読み上げていただき、長い日本刀で、最初の部屋の入り口に障子紙横七枚を縦に張り合わせた障子紙カットを、太田領事と私で執り行った。そして、シャンパンやサンドウィッチで祝宴をした。一ヶ月前から何度か新聞やチラシの広告をしておいて頂き、二日目の新聞の顔写真入りの記事などが宣伝効果を上げたようで、四日間の会期中約一六〇人の来観を得た。



そして、この時の記者の撮った私の写真六枚がインターネットで売られていた。最終日、二時間おきに三回のデモンストレーションをした。「春夏秋冬」を半切に、楷書、行書、草書の三体で書いた。私が筆を持っている時、書いている時、物音ひとつせず、緊張した静寂な時が流れていた。そして、Pさんは書道に関する説明をしてくださり、個人レベルの伝統文化交流が出来たと思う。作品は全部置き、神那先生の額作品はメインの部屋の鎧兜の後ろの壁に常時展示されています。次の日、エディンバラの日本国総領事館に表敬訪問しました。

J&Pさんが、「今度は、ニューヨークか、シドニーか、ロンドンか? 僕たち二人は必ず応援するよ!」と。

たくさんの人に助けられ、香石書展が成功しました。夢を高く持ち続けること、弛まず努力すること、そして、相田みつをの言葉に「そのときの出逢いが、その人の人生を根底から変えることがある。よき出逢いを。」書道研究温知会員であることに、感謝しています。